

シェアリング、贈与、交換 — 共同体、親交関係、社会

Sharing, Gift, Exchange — Community, Intimate Relationship, Society

丹 野 正*

Tadashi TANNO

キーワード：狩猟採集民、アカ・ピグミー、物のやりとり、社会関係、所有権

Key Words：Hunter-gatherers, Aka, Goods-transference, Social Relationship, Ownership

要旨：

モースは1925年の『贈与論』で、古代社会や世界各地の未開社会の人びとは物の授受を、近代社会に一般的な「交換」とは異なり「贈与」という形態で行うこと、および一方の社会ではなにゆえに贈与・贈答という形をとり、他方の社会では交換という形をとるのかを検討し、それが双方の社会における人間関係や集団間関係のあり方の相違に基づいていることを検証した。

その後未開社会の詳細な現地調査が大幅に進展し、狩猟採集民社会の居住集団（バンド）やキャンプにおける人びとの間での物の授受、とくに狩猟の獲物の分配についても詳しい調査が行われた。そしていずれの社会においてもバンドは長期的には離合集散しているのだが、獲物の肉はつねにキャンプ内の各家族に分配されることが判明している。多くの調査者は、獲物はそれを殺した者の「所有」に帰すると彼ら自身が考えていることは疑いないとしたうえで、しかも、獲物の「所有者」は他のメンバーに肉を分配しなければならないという規範が存在することを確認、その理由を以下のように説明している。狩猟等の能力には個人差があり、自然のままでは多く獲得し所有する者には威信が、そうでない者には前者への依存と負い目が生じてしまう。そうした不平等が生じるのを回避するために、彼らは持てる者は持たざる者に与えねばならぬという社会的規範をたてているのであって、狩猟採集民の社会は基本的に「平等社会」である。

このような見解は、物の私的所有という概念を彼らもわれわれと共有するのだと前提したうえで物の授受を解釈し、いわば幻影をとらえて提示している見解だと思われる。本稿では、筆者が調査したアカ・ピグミーのバンドにおける物の授受の検討から、「交換」でも「贈与」でもない「シェアリング」(sharing)という形態の存在と、シェアリングに基づき日々の暮らしを直接共にする「共同体」としてのバンドという見解を提示した。

Abstract：

In *The Gift*, Marcel Mauss (1973 [1925]) points out that people of ancient societies and primitive societies transfer the goods in the form of “gift”, while modern societies “exchange”. And he discusses that the forms of transfer reflect the differences of social relationships among people as well as among groups in both types of societies.

After that, detailed fieldworks in “primitive” societies have advanced, and large amounts of knowledge about the goods transference of the hunter-gatherers' societies, especially meat distribution in the band, have been brought in. Based on such abundant data, many researchers

* 弘前大学大学院地域社会研究科（後期博士課程）地域文化研究講座

Regional Cultural Studies, Regional Studies (Doctoral Course), Graduate School of Hirosaki University

clarify that the game meat is always distributed to every family in a camp, though a camp is composed of families that meet and part in a long time-span. However, they postulate that people in hunting-gathering societies have an idea that the game is “owned” by those who killed it, and that people also have the norm that the “owner” must “distribute” the meat. Then, they explain the importance of such norm as follows. There exist personal variation in the hunting ability, so an excellent hunter might get the prestige against others who depend the meat on him, while the latter might get into debt on the former, in the condition of nature. The norm that have must distribute to have-nots should be established in order to avoid such inequality arising. The hunter-gatherers' society is basically “Egalitarian Society”.

I doubt that such view is premised on an assumption that they hold the idea of private ownership in common with us. This paper examines the transference of goods among the Aka, and presents the “sharing” as the third form of transference differing from both “gift” and “exchange”. In accordance with Mauss, this paper also argues that “sharing” is a particular form of transference in the “community”, which differs from both “intimate relationship” and “society”.

はじめに

私は1973年と75年に、アフリカの熱帯森林地帯の東北端に位置するイトゥリの森の狩猟採集民ムブティ・ピグミーを調査した^(丹野、1977、1984)。また、83年、85年および87年には、同森林地帯の北西部を南流するウバンギ川の両岸に分布するアカ・ピグミーの調査を行った。後者については、私が滞在した三つのバンド（居住集団）における彼らの狩猟と採集活動と、その獲得物のキャンプ内での分配の様相について別稿^(丹野、1991)で報告し考察した。

ムブティもアカもともに狩猟採集民であり、10家族前後から成るバンドが日常生活の単位をなしている。アフリカの熱帯森林地帯には、バントゥ系などの焼畑農耕民諸部族が分布しており、ムブティもアカも、それぞれの地域に生活するいくつもの部族の焼畑農耕民いわゆる村人たちと、非常に古くから経済的社会的関係を取り結んできて今日に至っている。ムブティとアカのいずれにおいても、それぞれのバンドは当該地域の農耕民のどれかの村と親和的関係を結んでおり、その村の近くにベースキャンプを構え、この「村のキャンプ」と何ヵ所かの「森のキャンプ」との間の移動をくりかえしながら生活している。彼らが村のキャンプに滞在する間は、頻繁に村を訪れ、村人たちの求めに応じて彼らの畑づくりやさまざまな仕事を手伝い（または彼らに代わって行い）、村人が必要とする種々の森の産物を提供する。それに対して村人は彼らに食事や酒を提供し、畑の作物や古着、古鍋、槍の穂先や使い古した山刀といった鉄製品などなどを与えている。

こうしたピグミーと村人との何百年にもわたるいわば「共生関係」の結果、ムブティもアカも自分たち自身の言語を消失し、同じ地域に居住する農耕民部族の言語を母語としてしまっている。それゆえムブティとアカのいずれにおいても、分布は連続しているにもかかわらず北と南や東と西で言葉が異なる、といった状況が見られる。また、ある村の村人の言葉とこの村のピグミーの言葉が異なる、といったケースにもときおり出会うが、それは、かつて別の地域の農耕部族と関係を取り結んでいたバンドがその後この地域に移動してきたことを反映している。イトゥリの森地域の村人たちは部族間共通語としてスワヒリ語を話し、ムブティもこれを用いる。他方ウバンギ川の両岸地域では農耕諸部族もアカたちも部族間共通語としてリンガラ語を用いている。私自身はこれらの部族間共通語を用いて調査を行った。

ムブティにせよアカにせよ、私たちがいるバンドのキャンプに滞在していれば、私たちは彼らが毎日頻繁に互いに物をやりとりしているのを観察することになる。狩猟による獲物は解体ののち、分配のあり方には地域により違いがみられるが、いずれにせよ結局はキャンプのどの家族にも肉が

ゆきわたる。女性たちが採集してきた植物性の食物や昆虫の幼虫などの食用小動物は、その日採集に行かなかった女性たちにも分けられる。料理はそれぞれの小屋の前の焚き火で女性たちが行う。ムブティのバンドでは、男たちはキャンプ中央の焚き火の周りに集い、「男たちの肉」（肝臓や心臓など）や獲物の頭部などを料理して食べる。そこへそれぞれの小屋の妻たちから夫や息子へ料理が届けられ、それに皆が手をのばして、男たち全員で食べる。アカのキャンプではこのような男たちの食事は見られず、それぞれの家族ごとに小屋の前の焚き火を囲んで食事をしていた。ただし、それぞれの女性が自分の料理の一部をいくつかの葉や皿に盛り分け、それらをあちらの女性へこちらの女性へと子供に持たせて届けさせていた。つまりそれぞれの家族は、自分たちの料理とともに何家族もの料理を食べているのである。

また、キャンプ内での彼らの間だけでなく、上記のように村のキャンプ滞在時には彼らと村人の間でも毎日のように物やサービスのやりとりがなされる。そして、獲物の肉を多めに得たり、村人も好む蜂蜜やきのこと類や食用小動物を多く得た場合には、彼らは自分と個人的に親密な関係（とはいえ決して対等な関係ではない）にある村人にその一部を持参して分け与えてもいた。

ムブティの居住域であるイトゥリの森地域は、かつてのコンゴ動乱の時に反政府軍の拠点となったため、村人たちが銃を所持することを地方行政が禁じていた。そのため、ムブティの森のキャンプには、町や村に燻製肉を運んで売ることを目的とする村人の肉買い商人が訪れて滞在し、彼らが背負ってきた畑の作物や古着をムブティの獲物と交換することもしばしば見られた。彼らのなかには現金でムブティの獲物を買う者もいた。こうした森のなかや村での交換・売買では相場としての交換割合もある程度定まっており（もちろん互いの間で交渉が行われる）、これはまさに交換そのものである。このようにして、ムブティはお金を知っており、彼ら自身お金で物を売ったり買ったりもしていた。

他方、アカの地域では、かなり多くの村人が銃を所持しており、自らも銃猟を行うが、その一方でなじみのアカの男に銃と2・3発の散弾を持たせて、アカに銃猟をさせることもしばしばである。このような場合、獲物はその大部分が当の村人のものとなり、当のアカは獲物の頭部と内臓（の一部）をもらうだけである。これは、アカが森のキャンプに滞在しているときも同様であった。村人は銃と弾（および自分の食料と鍋）を持参して彼らのキャンプに滞在し、アカの男に毎日銃猟を行わせ、その獲物の肉を燻製にする。アカが銃猟で手にする肉は上記のようにほんの少しである。ここではムブティの場合のような交換は生じなかった。

また、私が調査したアカのいくつかのバンドでは、彼らはお金を知らなかった。村人たちはもちろん、日常的というほどではないがお金を使用し、換金作物（コーヒーなど）その他を売ってお金を得ている。だが、彼らはアカからお金で物を買うことはしない。別稿^(丹野、2002)で述べたように、アカはなにごとにつけ数詞で数えることがないため、お金を数えることもできないのである。このことについては後述する。

本稿では、アカたち相互の間での日常的な物のやりとり、およびアカと村人の方での物の授受や物とサービスとのやりとりをどう理解し把握したらよいのか、それらの間に違いがあるのか、あるとすればどんな違いか、そしてそれは何に起因しているのか、といったことについて検討したい。というのは、未開社会における人びとの間でのさまざまな形をとっての物のやりとりを、多くの文化人類学者が、いずれにせよ結局は交換のある形態なのだと考え、あるいは贈与交換という意味不明の言葉でくくったりしているからである。社会的生活様式がシンプルな狩猟採集民に関してはとくに、研究者は彼らのうちに近代市民社会におけるような自由な個々人というイメージを投影し、彼らの方での物の授受やそれらを通じての相互関係を、特定の個人との依存・被依存関係に入り込まず、互いに拘束されない自由で平等な狩猟採集民の反映として解釈する傾向が強いと思われる^(丹野、1991)。

アカのキャンプにおける分配

私が調査を行ったアカの三つのバンドのうち、二つのバンドはウバンギ川東岸（当時の国名はザイル、現在のコンゴ）のS村およびN村と関係を結んでいた。他の一つは西岸つまりコンゴ共和国側の森の奥にキャンプしていたバンドである。これらのバンドおよび彼らのキャンプをいかではS、NおよびEと略記する。

Sバンドは私が1983年に訪れた際に、男たち11人（と3頭の犬）だけで私と私の調査助手の村人を伴って森のキャンプに移動した。その理由については前稿^(丹野、1991)で述べたので省略する。森のキャンプでは網罟も行ったが、得られた獲物は槍猟によるダイカー類（森林性のカモシカ）がほとんどであった。とうぜんそれらはメンバーのうちの誰かが仕留めたものであり、私の質問に対する答えは、獲物は基本的にそれを仕留めた者のものだ、ということだった。しかし、彼らがキャンプに戻ると、獲物は当のハンター以外の数人によって解体され、年長者であるバンドのリーダー（村人への対応との関係でバンドの長という意味で村人からカピタと呼ばれる者）が、当のハンターを横に立たせて彼の同意を得ながら、私（助手は私に含まれる）も含めて12人分の肉塊に切り分けさせ、これは誰へ、これは誰へ、と分配を指図していた。彼らには、槍猟による獲物の肉はそれを仕留めたハンター自身は食べてはならないという禁忌があり、現に彼らは自分の獲物の肉はまったく食わず、アフリカマイマイや蛾の幼虫などを採集してきて、それを一人料理して食べていた。そして自分の肉は燻製にしていた。家族に持ち帰るためとのことだった。

1985年のNバンド（および次のEバンドでも）のキャンプでは、私は調査助手を伴わず、私一人で滞在するという方式をとった。このキャンプは村のキャンプであり、3～5日ごとに（つまり肉がなくなってしまうと）男女一緒に網罟を行っていた。彼らの場合もムブティと同様に、網罟の獲物はそれが掛かった網の所有者のものである、というのが私の質問への答えであった。私の滞在のはじめのころ、網罟の日には、このキャンプの南2キロメートルほどのところにキャンプしているサブグループ（Nバンドの者は彼らもわれわれの仲間だと私に説明していた）も、彼らと一緒に網罟を行っていた。しかし、ある日からのちはこのキャンプのメンバーだけでやるようになった。その理由を尋ねると、当日は彼らの網にだけ獲物が掛かり、それまでは獲物を分け合っていたのに、その日は彼らはそれを分けずにすべて持ち帰ったからだとのことだった。しかし実際にはむしろ逆に、Nバンドとこのサブグループのメンバー間に気まずい関係が生じていて、その結果獲物を分配しないという行動に至ったようである。また、獲物はその網の所有者のものという前提に彼らがたっていることを示唆する次のような事例もあった。ある日の獲物はXの網に掛かったもので、その肉が私にも配られたので、私はXから肉をもらったと思った。このことを察した女性Yが私に、Xが使っている網はYの網であること、この肉はXの肉ではなくYの肉でありYがくれたものであることを、そっと告げたのだった。

しかし、「この獲物は私（あるいは彼）のものである」という表現は、私のような部外者が「これは誰のものか？」と質問するからこそ言われることであって、彼らの間では通常けって表面化せず、暗黙のうちにとどめおかれることである。実際には、獲物が小型のブルーダイカー（体重4～5キログラム）の場合には、網罟の途中の休憩時に女たちが解体して彼女たちどうしで分け合っていた。また中型のダイカー類（体重20キログラム前後）の場合には、当の獲物を捕らえた者ではない2～3人の男がそれを解体し、最年長のカピタが指図しながら、全家族（および私）に分配していた。そして当のハンターはその場から離れたところで休息したり会話しているのが常だった。

植物性食物の採集は女性の仕事であり、他方で彼女たちは村の女の畑仕事などの手伝いにも出かける。後者の場合には彼女たちは村人から畑の作物をもらってキャンプに戻る。いずれの場合にも、彼女たちはその日キャンプに残っていた女たちに採集物や畑の作物を分け与えていた。

私が1987年にEバンドの森のキャンプを訪れたとき、その近くに別のバンドに属する小グループもキャンプしていた。彼らはしばらくの間一緒に網猟を行っていたが、その後この小グループは彼ら自身のバンドのもとへ戻った。Eキャンプは木材伐採会社が切り開いた道路の横に位置していたので、人夫たちが彼らにしばしば銃猟を依頼し、その獲物を受け取っていた。さらに、このキャンプに何泊かして銃猟を依頼（というよりむしろ強要）する村人がつぎつぎにやって来た。そのため彼らは網猟をあきらめて、銃猟以外の者ははね罟に切り替えた。既述のように銃猟の獲物は肉の大部分を銃の持ち主が取るので、銃猟はキャンプのメンバーには肉をほんのわずかしかもたらさない。彼らは網猟の獲物はもちろん全家族で分けていたし、個人猟であるはね罟で捕れた中型のダイカー類や大型のコシキダイカーも、いつも私を含め全家族数の肉塊に切り分けられ、分配された。

Eキャンプの女性たちの中での採集食物の分配も、S・N両キャンプにおけるそれと同様だった。生の肉や植物性食物がこのようなキャンプのどの家族にも配分されるだけでなく、それらをそれぞれの女性が料理したのちに、それがさらに女たちの間で一部ずつ行き来していたことは「はじめに」で既述したとおりである。

調査地での私の滞在様式 — “ありがとうと言うな”

ここで、私とムブティやアカとの間での物のやりとりについても述べておく必要があるだろう。ムブティの調査時は、私は1人または2人の村人を通訳や荷運びや料理等々の調査助手として雇い、ムブティのキャンプではわれわれはいつも複数の存在であった。そのために、われわれ（つまり私）とムブティとの間での物のやりとり、とくにムブティの肉を私が入手する方法としては私がお金で買うしかなかった。私が肉買い商人のように物々交換をするためには、さらに人手を雇わなければならないし、われわれがムブティに肉をねだるには、2人や3人といえどもわれわれの数は多すぎた——ムブティたちもそう考えたに違いない。

その後、アカのSバンドの調査では1人の村人を助手として伴ったが、NバンドとEバンドの調査では、私は1人で彼らのキャンプに滞在するという方法をとった。私はアカに、ムブティの調査時と同様に塩とタバコを少しずつあげた。私は食料を目に見えるかたちでは携行しなかった。テントも持たず、キャンプでは私の小屋をつくってもらった。女たちは背負ってきた薪の一部を私の小屋の前に置いてくれ、私のバケツを持っていき水を汲んで来てくれた。私は夕方になり暗くなっても料理をしないで、焚き火の前にアカの男たちと話をしていた。その間に、女たちはそれぞれの小屋の前の焚き火で料理をしていた。タンノ（私）は食べ物がないと判断したのであろう女性の1人が、料理した食物の一部を大きな葉っぱに盛って私に届けてくれた。私がそれをうまいうまいと言って食べると、次つぎに女性たちが料理を盛った葉や皿を持って来てくれた。ちなみに、村人はアカから生の食料は受け取る（そして自分たちで料理する）が、アカが料理した食物は口にしない。彼らの料理は料理ではないと村人はみなしているからである。アカの女性たちは（そして男たちも）タンノが自分たちの料理を食べるかどうか不安だったらしい。その日以降、私は食料を心配する必要はなくなったのだ。女性が採集してきた植物性食物は私にも分けられたし、狩猟の獲物の肉は、小屋の数つまり家族の数に私を加えて切り分けられ、それら肉塊の一つが私に配られた。

私が彼らにあげることができる物は塩とタバコぐらいしかなかったし、しかもほんの少しずつだった。またときおり村人からヤシ酒を買って来て、キャンプで一緒に飲んだが、これを彼らは大人の男女のみでなく子供たちも加えて皆で飲むので、一人当たりは少量にしかならなかった。彼らも私にいつも食物も水も薪も分け与えてくれたし、その見返りを要求することはなかった。私は彼らから物をもらいサービスを提供されるたびに、いつもつい「ありがとう」と言ってしまった。日本語の「ありがとう」に相当する語彙は彼らの言葉にはないので、彼らが村人らに謝意を表わす必要があるときは、フランス語の「メルシー」という語を用いる。それで私も「メルシー」と言った

のである。私が彼らのキャンプに滞在して何日かたったのち、私が毎日何回もメルシーと言うのを見かねたアカの年長者が、次のように私に注意した。われわれは互いにメルシーと言うか。言わない。われわれはおまえにメルシーと言うか。言わない。おまえはわれわれが物をあげるそのたびにメルシーと言う。言うな。われわれはおまえからもらって当然であり、だからメルシーと言わない。おまえもわれわれからもらって当然なのだ。だからメルシーと言うな。黙って受け取ればいいのだ。

アカと村人の間での物のやりとり

村人は自分たちはBatu（またはBantu）であると言い、アカをBatuに含めない。彼らはBambengaであってBatuではない、と言う。他方、アカたちは、自分たちは「森のBatu」であり、彼らは「村のBatu」である、と言う。いずれにせよ、両者ともに自分たちと相手は異なる存在だと考えている。端的に言えば、村人はアカを自分たち以下の存在と位置づけている。アカはもちろんこのことを承知している。村人はアカから生の（および燻製の）肉や魚や、生の植物性食物は受け取る（そして自分たちで料理する）が、アカが料理した食物は食べない。私の質問に対して彼らは、アカは料理を知らない、またはアカの料理は料理ではないからだ、と説明していた。また、村人たちの飲食の場にはアカは同席できない。彼らの家の中でも村人は酒を同じ器でアカとともに飲むことはないし、同じ器にとともに手をのばして食事することもない。村人がアカに酒や食事をふるまうときは彼らの分は自分たちのとは別の器に用意して与える。

ちなみに、私は何人もの村人から、日本のバンベンガはどんな暮らしをしているのかとか、日本のバンベンガはどんな動物を狩猟しているのか、ヨーロッパのバンベンガは……？、などと質問された。同様の質問をアカたちからも受けた。彼らはヨーロッパ人を見知っているし、私をとおして日本人をも知った。彼らにとっては、あれらはヨーロッパのBatuであり、タンノ（私）は日本のBatuである。とすると、ヨーロッパのBambenga（またはヨーロッパの森のBatu）や日本のBambengaはどうしているのか、と考えたのである。つまり彼らの世界観では、どこにでもBatuとBambenga、村の人と森の人、あるいは農耕民または定住の民と狩猟採集の遊動の民という相異なる人間が存在するはずなのである。

村人とアカの間での物やサービスの授受については、本稿のはじめに概略を述べた。一つの村にはそれと関係結んでいるアカのバンドがたいてい一つは存在する。大きい村にはこうしたバンドが2～3存在することもある。さらに、こうした村とバンドの間では、集団間の関係だけでなく村人のある男とアカのある男（そして前者の妻と後者の妻）が持続的なパートナー関係を保っている。村の男性や女性は、自分のパートナーであるアカには気前よくふるまい、その代わりにさまざまな仕事（の手伝い）を頼む。アカもまた既述のようにパートナーの村人に自らすすんで森の産物を提供することもある。

N村は100戸ほどから成る大きな村だが、この村のアカはNバンドのみで、アカの持続的パートナーを持たない村人も多かった。彼らの場合には、村を訪れているアカを呼び止めて仕事を頼むか、または彼・彼女自身がキャンプを訪れてアカの誰かに仕事を依頼していた。このような場合にも、村人は事前や事後にまたは前後ともに、ヤシ酒や畑の作物その他の品物を提供していた。しかしその一方では、キャンプを訪れた村人の何人かが、タバコ、塩、少量の大麻、あるいは葉に包んで調理した主食の一種や、畑の作物を持って来て、それらと引き換えにこれこれの束の屋根葺き用のヤシの葉を採集してくる者はいないか、あるいは肉と交換する者はいないか、などと交渉していた。これらの村人は明らかに交換を意図しており、交換割合を明確に（しかも自分の物はできるだけ少なく、相手の物はできるだけ多く）提示していた。しかしその反対の例、すなわちアカが自分たちの物（たとえば肉）を村に持って行って、それを村人の何かと交換しようとした例は一度も見られなかった。

既述のように、村人がパートナーのアカに肉が欲しいと言い、かつ彼が肉を手に入れていれば、彼はそれをパートナーの村人に提供する。次のような事例もあった。Nバンドのカピタは彼のパートナーから正月用の肉をくれと頼まれたが、肉がなかったのでニワトリ一羽を持参した。彼はヤシ酒を飲ませてもらって夜キャンプに戻った。翌日以降も彼は夕方になるとパートナーの家に行き、ヤシ酒をふるまってもらった。5日の夕方も行ったが、今夜はもうヤシ酒はないと断られて、ただおしゃべりをしただけで戻った。翌朝、パートナーの使いの子供が来てカピタを呼んでいると知らせたので、彼は村へ行き、すぐに戻ってきた。何の用事だったのかと私が尋ねると、肉を持って来てくれと頼まれたのだ、ということだった。そして彼らは正月はじめての網猟に出かけた。

畑の作物をめぐるトラブル

アカは、村人との上述のような相互行為と相互関係を介して村人の畑の作物を得ているが、他方で、ときおり村人の畑から直接バナナ、キャッサバ、ヤムイモ、サトウキビなどの作物を取ることがある。たとえば、網猟から帰る途中に森を歩いているうちに、畑に行き当たる。おそらく彼らはそれが村の誰の畑なのかを知っているのであろう。人気がないのを確かめると女たちは籠を置いて畑に入り、作物の一部を取ってきて、籠に入れてその上を森床の下生えの葉で覆い、キャンプに戻る。

これは村人から見れば明らかに盗みである。翌日、畑の持ち主がキャンプに怒鳴り込んで来る。アカたちは素知らぬ顔をしてあらぬ方を向いており、このような場合カピタが彼または彼女に対応することになる。「それは俺たちではないよ、俺たちは昨日はずっとキャンプにいたもの。誰かよその者たちのしわざだよ」などと言い逃れようとするが、最後は謝ることになる。

しかし、アカたちがこれをやめることはなさそうである。なぜなら、彼ら自身にとってはこれはけっして盗みではなく、盗人呼ばわりされる理由はないからである。以下は、「タンノ、おまえは泥棒に食わせてもらっているのだぞ」と一緒に怒られた私に対する説明である。彼らが村人に直接抗弁することはない。村人に通じる話ではないことを重々承知しているからである。

アカの考えはこうである。あの畑は俺の畑だとあの村人は言うが、実際に木々の切り払いをはじめ何もかもやってあの畑をつくったのは誰か。俺たちではないか。だからその畑の作物が稔ったら、その一部を取ってもいいはずだ。取ってきたのはほんの少しだぞ。なのに彼は、あれは俺の畑であり、その畑の作物も俺のものだ、それをおまえたちが取るのは盗みでなくて何であるか、まさに盗みだ、と言う。どっちがいったい間違っているのか。

アカは私に以上のように説明し、私から村人たちに彼らの言い分を伝えてもらいたいようであった。翌日私は村に行き、彼らの考えを村人たちに伝えたが、次のように反論された。われわれが畑づくりにあたってアカたちに手伝ってもらうのは、事実そのとおりである。しかし、われわれはその手伝いに対して、事前にそしてその日ごとに、また事後にも彼らに食事や酒を与え、また畑の作物や彼らの欲する古着や古鍋や山刀などを見返りに与えている。彼らの手伝いに対してわれわれはそのつどお返しはしているのだ。だから、できあがった畑はわれわれの畑であって彼らの畑ではもちろんないし、われわれと彼らの共同の畑でもない。その後の植え付けや除草なども彼らに手伝ってもらうとはいえ、そのつど同様にお返しをしているのだから、畑で稔る作物もわれわれのものである。にもかかわらず、彼らはこっそり取っていく。これは盗みではないのか。タンノ、おまえはどう思うのか。

さらに、村人は次のようにたたみかけた。われわれは彼ら（アカ）にいつも畑の作物を分け与えている。彼らが食べ物がなくなるときには、畑の作物が欲しいときには、われわれに食べ物が欲しいと直接言いに来ればよいのだ。彼らがそのように頼んだときに、われわれはこれまで拒否したことがあったろうか。なぜ彼らはわれわれに直接言わずに黙って盗んでしまうのか。

私はキャンプに戻って、村人の見解をアカに伝えた。アカたちは、畑づくりにあたって村人が彼らに飲食やさまざまな物を提供してくれたのは確かにそのとおりだと認めた。しかし、あの畑を実際につくったのは誰なのか、とカピタはキャンプのみんなに問いかける。われわれだ、と全員が答える。ならばわれわれの行為は盗みなのか。いや、盗みではない。ではどうしてわれわれがつくった畑の作物を、しかもちょっとだけ取ってくるのが非難されるのか。そうだ、彼らのほうがおかしいのだ。村人たちのいない場面で、異邦人の私にせめて訴えたいと思ったから、彼らはリンガラ語でこうした会話をしたのであろう。これは村人にけっして通じる話ではないことを彼らは身にしみてわかっているの、村人には言わないのである。

両者の間でのこのようなトラブルは何世代にもわたってくりかえされてきたことであり、双方とも自分たちの見解を曲げることができない問題だったと考えられる。でなければ、アカははるか以前に自分たち自身の畑をつくっていたはずだからである。実際、こうしたトラブルが起こるたびに、村人が彼らに最後に言うのは、「自分たちの畑をつくれ」、である。おまえたちはわれわれの畑づくりの手伝いをおして、畑づくりのすべてを知っているではないか。それなのにどうして自分たち自身の畑をつくらうとしないのか。それに対する言外の（つまり私への）回答は、以下のとおりである。われわれは森の人であり、森には食べ物が豊富にある。彼らは村の人であり、畑をつくる人びとである。畑づくりを手伝ってくれと頼むから、われわれはつくってやる（または一緒につくる、手伝う）。しかし、われわれが自分たち自身のためになぜ畑をつくらねばならないのか。その必要・理由はない、と彼らは言う。アカのこうした見解に対応するように、村人のなかにも稀ではあるが次のように私に語った者もいた。実際に畑づくりをするのは彼らなのだから、そしてどうせ彼らは畑から作物の一部を取っていくのだから、彼らの手伝いに対しては気前よくふるまい、その代わりにより大きな畑をつくらせればよいのだ。できた大きな畑の一部は彼らの畑だと思っていれば、彼らが盗んだといちいち目くじらたてる必要はない、と。おそらく、かつては村人の多くはこのように対処していたのだらうと思われる。というのは、このようなトラブルの末にアカのバンドがその村を去ってしまい、戻って来なくなると、現在でも村人たちの間であの村にはアカが寄りつかないと噂され、アカからも他の村の人からもあの村の住民はケチなのだと評価されてしまうからである。

数えることとお金について

1983年9月下旬、Sバンドの男たちと私と私の調査助手Tが森のキャンプに移動して数日後、Tは彼らが数を数えられないらしいことに気づいた。そこで彼は10ザイルと5ザイルの紙幣を示して、それぞれいくつかと質問したが、誰も答えられなかった。5ザイル2枚では？ これにも答えはなかった。さらにTは彼らに、1から10までおまえたちの言葉で数えてみろと言ったが、みんな尻込みして数えようとしな。そこでTはトウガラシを10個並べてから、二人を指名して数えさせた。どちらも1個目から4個目まではemoti、ebaye、esato、banaと数えたが、5個目以降のトウガラシを指差されてもはっきり答えられなかった。周りにいた他の者からも声はなかった。翌日も彼らは網罟に出かけた。私は足の傷が化膿していて歩けなかったの、その日もキャンプに残った。午後に戻ってきた彼らに、網罟を何回やったかと尋ねると、答えはやはり「たくさん」だった。

1985年の調査時に滞在したNバンドのキャンプでも、私が網罟に同行できないときには、カピタにその回数を数えてきてくれと頼んだ。彼の答えはいつも10回だったので、ある日、今日こそはきちんと数えてこいと、無理を承知で念を押した。網罟から戻ると彼は、今日はこれだけやったと言って、手に握っていた小枝を私に示した。それは8本あった。網罟を1回やるごとに下生えの小枝を折り取ったのだ、とのことだった。それだけでなく、私にはどれも同じ色合いと長さで細さに見える小枝を、彼は初回の枝から8回目の枝まで順に並べ、これのときは……、と言いながら、それぞれの回ごとに誰が何を獲り誰が何を逃がし、といった詳細をとうとうと語ってくれたのだった。

12月下旬、NバンドはキャンプをN村の南方から西方の小川の横に移した。乾季が進みそれまでの水場が小さな水溜りにすぎなくなってしまったからである。N村の北にはコーヒー・プランテーションがあり、コーヒーの実の収穫時期に入っていて、N村や近隣の村の人たちを日雇いで雇用して収穫にあたらせていた。それでも人手が不足したらしく、1月6日にプランテーションのマネージャーの使いがアカたちへの手紙を持ってきた。リンガラ語の手紙には、明朝からコーヒーの摘み取り作業に来てほしいこと、1キログラムの収穫につき1ザイルお金を払うこと、が記されていた。午後、アカたちが網獵から戻ったので、私はカピタに手紙の内容を伝えた。彼はこの日の朝村のある男から、翌日から畑の切り開きの手伝いに来てくれと頼まれ、何人かで行くことを約束していた。だから彼はプランテーションの仕事は断るような口振りだった。

ところが、翌早朝には彼をはじめ14人の男女がプランテーションに出かけてしまった。仕事は朝の6時から12時までで、彼らは1時ごろに戻ってきた。カピタによると、彼らはマネージャーに仕事の見返りはお金ではなく、鍋や山刀や衣類（古着）など各自の欲しい物をくれと言い、彼もそれに同意した。だから明日以降もプランテーションに行く、とのことだった。2日目に私はプランテーションに彼らのようすを見に行った。彼らは一人ずつずだ袋を渡され、それにコーヒーの実を枝からしごき取っていた。そこは陽射しがきつく、すごく暑かった。事務所では使用人が村人やアカが背負ってきたずだ袋の重量を計り、各人の当日の収穫量を記録していた。その横の日陰には、石鹼、スプーン、フォーク、岩塩、タバコ、魚の缶詰、鍋（新品）、ノートなどが値札とともに並べられている。村の若者が明日から来れないので今日までのお金を払ってくれと言うと、使用人は、今日はお金はない、土曜日に経営者が持ってくる、いま欲しいのならこれらの物で受け取れ、と言っていた。5日目は賃金の支払日だった。この日も彼らは各人の収穫量を計り、当日までの合計を計算したのち村人たちに賃金を払った。アカたちは、お金ではなく約束していた品物をくれと言った。するとマネージャーは、お金とはいかに便利なものであるかを説教しはじめた。お金はおまえたちが欲しいと思うどんな品物とでも、町の店に行けば換えられる便利なものである。だからこのお金で欲しい物を買えばよい。しかも彼は、アカたちが前もって頼んでいた品物をいっさい用意していなかった。そのうえ彼は、お金がいやならこれらを持って行け、おまえたちも食器を使って食べればよい、と言ってプラスチック製の皿やボールなどを指差した。しかし彼らは誰もそれらを受け取らず、ぶつぶつ言いながら、しぶしぶお金を受け取った。しかし、自分が手にした紙幣が計何ザイルなのか、誰も分かっていなかった。明日からも来てくれよ、今度はおまえたちの欲しい物を用意しておくから、とマネージャーは言ったが、誰も返事をしなかった。

近代市民社会 ― 物の所有と交換について ―

上述のようなアカたち相互間の日常的な物のやりとり、そしてアカと村人の中での物の授受やサービスとその見返りのやりとりを、私たちはどう理解したらよいのか、それを以下で検討したい。

そのためには、最初に、われわれの社会では人びとはどのような形で物のやりとりを行っているか、人と人との関係、人と物との関係、および物と物との関係はどうなっているかを確認する必要がある。

われわれの社会すなわち近代市民社会は、膨大な人口から成る社会である。家族内の人間関係と家族外での人間関係は様相が異なるし、この社会における人間関係という場合には家族外での関係を一般にさすので、以下では家族外での人間関係について検討する。この社会の人びとは多種多様な職種からなる大規模な社会的分業を行っており、膨大な種類の生活資材や生産手段を産出したり種々のサービス業務を行う。それらが人びとの間を流通することにより、この社会全体の生活が維持される。

近代市民社会の人間は自由・独立の存在であり、自由と独立は基本的人権となっている。さらに

所有権または財産権も、この社会の人の基本的権利の一つである。この社会では土地も含め物はすべからず誰かの所有物であって、それらをどう取り扱いどう処分するかは、その所有者の自由である。人びとは自分が生産した品物のみで家族の生活を営むことは不可能なので、自らの生産物を他者に提供し、多数の他者の多様な品物を入手することによって生活を営む。この社会におけるこの提供と入手は、お金での売買も含めて「交換」によって行われる。自分の所有物と他者の所有物との交換が、この社会で普遍的に採用されている方法である。

いまここに、品物Xを所持したAと、品物Yを手にしたBという2人が出会ったとしよう。AとBは互いに自由独立の存在であり、XはAの、YはBの所有物である。AはBの持っている品物Yが欲しい・得たいと思ったとする。AがBに「それをください」と言い、Bが同意すれば、Aは品物Yを得ることができる。もちろんBは断ることもできる。YをもらったAは、Bに「これをあげるよ」と言って品物Xを差し出すかもしれない。Bはそれが欲しければもらうであろう。あるいは「それはもってるからいいよ、要らない」と言って断るかもしれない。この「あげる」「もらう」においては、AがBにXをあげることと、BがAにYをあげることは、基本的に別々の行為であり、一方が成立するためには他方も必ず伴わなければならないわけではない。

ただし、AにねだられたBが、「あなたもXをくれるなら、これ(Y)をあげてもいいけど、そうでないならいやだ」、あるいは「ただであげるのはいやだけど、交換ならいいよ」と言うかもしれない。Bのこの提案にAも応じたとしよう。つまり二人が同時に自分の所有物を手放し、相手のものを受け取ることになる。これが「交換」である。ただし「交換」にはもう一つの要件がある。それは、交換される二つの異なる品物XとYの量的割合についての合意である。BはAの品物x量のXに対しては、自分の品物Yはいま手にしているy量の半分で充分だと考えて $y/2$ 量のYを差し出し、他方Aは、それでは少なすぎる、もっと多くしろ、といったことになる。要するに双方がともに適正またはやむを得ないと考えるある量的割合で合意することが必要である。両者はともに自由・独立なのだから、合意できなければそれまでである。別の相手を探せばよいというただそれだけである。

この社会ではまさに「私の物は私の物」である。これは一見トートロジーのようだが、決してそうではない。私がなんらかの（ただし適正な）方法で手に入れた物は、私一人に帰属する物で、それをどうするかは私の自由だという意味である。彼・彼女はそれを自分で使用し消費することもでき、だれかに与えたり、誰かの別の品物と交換することもできる。彼は自分のある品物を相手の別の品物と、双方が合意したある量的割合で交換する。双方の品物は姿かたちは違っていても、その割合のもとでは等しいもの・同じものだからである。彼は交換を通じて、自分の所有物の姿かたちをどんな品物にも変えることができる。しかも、彼は交換の前と後では違う物を手にしているのだが、にもかかわらず彼は同じものを所有している。相手も同様である。これをヘーゲルは次のように述べている。

§ 77 実質的な契約（交換契約のこと、丹野注）を結ぶ双方は、それぞれが同じ所有物をもって契約に入り、それを同時に手放すのだから、契約のうちにもともと存在する同一のままの所有物は、交換によって所有者が変化する外的な物とは区別される。同一のままの所有物とは価値のことであり、それは、契約の対象となる物が外見上まったく質の異なるものであっても、たがいに等しく、それこそが物のうちにある一般的な要素である。（ヘーゲル『法哲学講義』、長谷川宏訳、166～7ページ）

つまり、交換の前と後では彼は違う品物を手にしているが、にもかかわらずそれらは同じ物であり、彼は同じ物を所有し続けているのである。なぜなら、双方の品物のなかにある同じものが等しい量だけ内在するからである。この「ある同じもの」は交換されるとどんな品物にも共通に内在するものであるが、その姿かたちは目に見えない、姿かたちのないものである。ヘーゲルはこの共通に

内在するものを、同時代の経済学者に倣って「価値」と呼ぶ。この社会の人びとは、双方の物のなかのこの目に見えないもの・「価値」の量を比較し、等しいか否かを判定することができる。そして等しいからこそ彼らは交換する。そうでなければ一方は得をし（より多く所有し）、他方は損をする（より少なく所有する）ことになる。これでは得をした人はともかく、損をした人は自分の基本的人権を保持することができない。だから、近代市民社会の人びとは、一部の人だけではなく全員がこの目に見えないあるものを透視してその量をはかることができるようになった人びとである。では、この社会の人びとがさまざまな品物のうちに透視することができる「価値」とはいかなるものなのか。マルクスは『資本論』の第一章「商品」において、商品の「価値」についての経済学者たちの見解を顕微解剖的に検討し、商品の価値なるもののフェティシズムを暴き出している（丹野、1996、2003）。

アルカイク社会

われわれの日常生活では、物のやりとりは売買も含めて大部分は「交換」である。しかし、それがすべてではない。私たちは身近な関係にある人との間で、「あげる」・「もらう」という行為をくりかえしている。それは友人間のプレゼントだったり、お祝いやお見舞いの贈り物だったり、感謝や返礼の贈り物など、さまざまである。贈与は贈られる品物とその贈り手と受け手からなる。贈り物は贈り手の所有物であり、それは贈与によって受け手の所有物となる。

モースは『贈与論』（1973、原著は1925年）で、未開社会や古代社会における贈答の慣習について文献研究を行った。彼は、すでに古代ギリシャをはじめいくつもの古代社会で交換が日常的に行われ、貨幣も用いられていたことを承知していた。しかしその一方で、彼らはつねに交換とは別に贈答を行っていた。そして、1920年代はじめまでに調査された多くの未開社会では、人びとや集団間の物のやりとりは交換ではなく贈答として行われる（行われた）ことが明らかになった。しかもそれらアルカイク諸社会では、贈り物をしなければならず、受け取らなければならず（断ってはならない）、そして後日必ず返礼をしなければならぬことが規範となっている。それはなぜなのか。とくに返礼の贈り物がなぜ義務となっているのか。これがモースが本書で究明しようとした課題だった。

彼にとって以下のことは自明のことであり、検討の前提でもあった。第一に、既知のどの人間社会においても、内部の人びとや集団相互は多かれ少なかれ必ず物のやりとりを行っており、人びとの間に物のやりとりがないという社会は存在しないし、存在しなかった。第二に、物のやりとりには、交換と贈答という二つの形態があり、これらは互いに異なる社会的行為である。既述のように多くの文化人類学者は、贈与・贈答は結局は交換であり、交換の一形態であると考え、また、このことを最初に明らかにしたのがモースであり『贈与論』であったと述べているが、これはまったくの誤解である（丹野、1993）。

近代市民社会であれ、中世や古代の社会であれ、贈答は交換とは異なる物のやりとり行為である。交換の世界に日常どっぷり浸っている現代社会の人間にとっては、贈与は基本的に贈り手の自発的な行為であり、誰に何を贈るか否かは贈り手の意志による任意の行為である。相手がそれを受け取るか否かも受け手の自由であり、また、受け取った場合にも、返礼をするかどうかは基本的には受け手の自由意志にゆだねられている、とわれわれは考えがちである。こうしたモダン社会の“常識”から見ると、アルカイク社会の贈答が三つの義務として行われ、とくに必ず返礼の贈り物がなされねばならないことは、奇異に思われる。逆に交換においてこそ、相手の物を受け取るからには同時に自分の物を手放さなければならない。とすると、彼らの贈答は形を変えた交換なのではないか、とモダン社会の人間は思うかもしれない。しかし、贈与は交換ではないことはモースにとって自明のことだった。彼が究明しようとしたのは、アルカイク社会では贈答がなぜ義務的行為となっているのか、その理由であった。

「その理由」といっても、モースが探求したのは、調査者の「なぜ」という質問に対して未開社会のインフォーマントが答えた個別の説明ではない。一見したところでは、モースは現地人の一人の呪術宗教的な説明を引用し、それをあれこれと解釈することによって、つまり「原住民をもちだして自らをごまかす」(レヴィ=ストロース、1973, p30; サーリンズ、1984, p182) ことによって、その理由を説明しているようである。しかし、モースの考察の脈絡を詳細にたどると、けっしてそうではないことが判明する。彼は現地人の一見呪術宗教的な説明を解きほぐして検討することによって、アルカイック社会における人間関係および集団間の関係のあり方が、モダン社会において一般的な人間関係——互いに自由・独立の他人であるという関係——とは異なっているのだということを解明したのである(丹野、1993)。しかも、アルカイック社会すなわち小規模な社会に一般的な人間関係のあり方は、モダン社会で消滅してしまったのではなく、身近な人びとの間ではいまなお社会の水面下で脈々と生き続けているのだということも指摘したのである。それが交換ではなく贈答として物をやりとりする関係である。これは、逆に言えば、アルカイック社会でも人間関係のあり方に一部であれ変化が生じれば、その人びとの間では贈答ではなく交換が行われるようになることを意味する。

交換のはじまり

それでは、「交換」はどのような場面で生じたのであろうか。マルクスは『資本論』のなかで次のように述べている。

諸物は、それ自体としては人間にとって外的なものであり、したがって手放されうるものである。この手放すことが相互的であるためには、人々はただ暗黙のうちにその手放されうる諸物の私的所有者として相対するだけでよく、また、まさにそうすることによって互いに独立な人として相対するだけでよい。とはいえ、このように互いに他人であるという関係は、自然発生的な共同体の成員にとっては存在しない。その共同体のとり形態が家長制家族であろうと古代インドの(インド古来の、丹野注)共同体であろうとインカ国その他であろうと、同じことである。商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接する点で、始まる。(マルクス『資本論』岡崎訳、原102ページ)

マルクスもここでモースに先がけて、モースと同様のことを指摘している。つまり、交換という形で物をやりとりする「このように互いに他人であるという関係は、自然発生的な共同体の成員にとっては存在しない」のだから、共同体の成員どうしでは交換は行わない。ただし、では彼らはどんな形で物のやりとりをしているのかを、マルクスはここでは直接言及していない。

人は狩猟採集や農耕などによって食料を獲得したり、自然に働きかけることによってさまざまな原材料を入手し、それらを加工製作して種々の道具等の物質文化を生産する。それらの物は、それ自体としては彼・彼女の身体の一部と化しているわけではなく、身体外の物である。だから彼・彼女が手放そうと思えばいつでも手放すことができる。手放すといっても、棄てることではない。それを誰かの手に渡し、その人が利用・使用・消費することを可能にするのである。自然発生的な共同体の成員どうしは、各自の獲得物や生産物をこのように直接融通しあう。また、各自の生産活動の産物を融通しあうだけでなく、生産活動自体も共同で行い、あるいは手分けしてつまり分業して行うであろう。この意味で、自然発生的共同体とは直接に暮らしを共にする人びとである。彼らの間では、物を手放すことが相互的である必要はないのである。

その必要を彼らを感じるのは、または彼らが誰かと対面したときに、自分が物を手放すからには相手も同時に彼の物を手放すべきだと考えるのは、どのような場合か。共同体の外の、他の共同体の、互いに他人であるという関係の場合である。そのような場合には、彼らは「ただ暗黙のうちに

その手放されうる諸物の私的所有者として相対するだけでよく、また、まさにそうすることによって互いに独立な人格として相対するだけでよい」。したがって、「交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接する点で、始まる」。このような場面でこそ、人は物の私的所有者として、当の物は彼・彼女の私的所有物として互いに会うことになり、互いに自由で独立の意志を有する人格として交渉することになる。

ただし以上のことは、理念的に過去に遡ってイメージした交換の起源である。過去のある時代のある地域にいくつもの自然発生的共同体が点在していたと仮定して、しかもそれぞれの共同体の日常生活は共同体内で自給自足的に営まれていたとしても、各共同体が成員の再生産を自己完結的につまり閉鎖的に行っていたとは考えられない。自然発生的共同体としての狩猟採集民のバンド（居住集団）や農耕民の集落においては、近隣の共同体は相互に通婚しており、人的交流が存在している。他方では、互いに敵対しているニホンザルやチンパンジーなどの群れ間でさえ、前者ではオスが後者ではメスが生まれ育った群れを出て他の群れに入ることが明らかになっている。このことは、ヒトの共同体はどこまで時代を遡ったとしても、通世代的な成員の再生産集団として閉鎖系であったはずがないことを示している。ヒトの祖先の集団が遠い過去のある時点まで互いに敵対していたとしても、だから各集団は閉鎖系つまり内婚集団であった、そして、集団間の敵対関係を解消するためにある時点から成員（女性）を“交換”するに至った、という従来の考え方はもはや成り立たないのである。対立している集団間でもメンバーの出入りは通世代的に存在した。問題は、個体間関係の履歴がある個体の移動と共に切れてしまう状態から、移動後も元の集団のメンバーとの間に持続するに至ったその基盤の探求であろう。それと同時に、移動個体を媒介にした元の集団の親密な個体と移入集団内の同様の個体との新たな関係の形成も可能になったと考えられる。

ともあれ、一つの共同体Aについて見れば、成員のある者は共同体Bの出身者であり、別のある者はCの出身者であり、……、またAの出身者は共同体B、C、……にも存在する。そして彼らを媒介としてA、B、C、……の共同体は互いに親族と姻族の関係で結ばれている。このような状況のもとでは、近隣の共同体の成員どうしは互いに他人であるつまり互いに自由独立の物の私的所有者であるという関係には立たないであろう。そうであれば、これらの共同体はむしろより大きな共同体の部分集合と見なすこともできよう。もちろんこの大きな共同体は、全員が一ヵ所に集住し、日常生活を共にしているわけではない。しかし、彼らが互いに訪問したときには、彼らの間では交換は生じないのである。交換はさらにその外側で、「共同体の果てるところで」行われることになる。

しかし、初めて出会った者どうしは必然的に互いに他人という関係に立つ、といった自然の法則は存在しない。人類はいつの時代のどこでも、既知の人と出会う一方で見知らぬ人との出会いを重ねてきた。そのたびに彼らは、互いに他人としてすれちがうか、それとも一方が他方を歓待することにより既知の関係のなかに組み込もうとするかを選択してきたであろう。後者の関係に入った者をここでは“友人”と呼ぶことにする。友人どうしは互いに訪問し、互いに歓待することにより、交換よりもむしろ贈答を行う親和的関係を構築することになる。モースが『贈与論』で取り扱ったアルカイック諸社会の事例は、このような関係が構築された人と人または集団間の、あるいは親族や姻族集団間の恒常的な贈答なのである。

以上は、マルクスの上掲の文章への補足である。小さな居住集団が広範囲に散在しているようなアルカイック社会では、贈与・贈答による物流が網の目状に広がっており、交換による物流はまだまだ生じていないというケースも多かったであろう。ただし、このような状況は当の社会の人口規模や人口密度が大きくなれば、内部の個別的な関係間ではともかく全体としては限界が生じるはずである。そしてそのような社会において、「交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接する点で、始まる」だったのである。マルクスは、上掲の引用文に続けて次のように述べている。

しかし、物がひとたび対外的に商品になれば、それは反作用的に内部的共同生活でも商品になる。(同上)

物が「商品」つまり交換の対象になろうと、「贈り物」になろうと、物そのものはある具体的な品物（たとえば塩と米）であることに変わりはない。同一の品物が一方では商品になり他方では贈り物になるのは、それらをとりかわす当事者どうしが、互いにどのような関係に立つかまたは入ろうとするかの違いである。共同体の外部との交換では、当事者は相互に他人で独立の人であり、物の私的所有者であり、そのような存在として相対すればよい。しかし、いったんこのような人間関係に足を踏み入れ、それになじんでくると、共同体内部の従来の人間関係に基づく物のやりとりも交換の様相をおびはじめ、身近な熟知した間柄であっても互いに独立した他人として、諸物の私的所有者として相対するようになる。それは換言すれば、従来の共同体がいくつかのより小さな相互に独立の共同体に分裂し、そして共同体の範囲のさらなる縮小に至るということである。こうした一連の反作用は、たぶん何世代かを通じた長い時間にわたって進行するのであろう。

マルクスはさらに続けて以下のように述べる。

諸物の量的な交換割合は、最初はまったく偶然的である。それらの物が交換されうるのはそれらの物を互いに手放しあうというそれらの物の所有者たちの意志行為によってである。しかし、そのうちに、他人の使用対象に対する欲望は、だんだん固定してくる。交換の不断の繰返しは、交換を一つの規則的な社会過程にする。したがって、時がたつにつれて、労働生産物の少なくとも一部は、はじめから交換を目的として生産されなければならなくなる。この瞬間から、一方では、直接的必要のための諸物の有用性と、交換のための諸物の有用性との分離が固定してくる。諸物の使用価値は諸物の交換価値から分離する。他方では、それらの物が交換される量的な割合が、それらの物の生産そのものによって定まるようになる。慣習は、それらの物を価値量として固定させる。(同上、原102～03ページ)

このようなプロセスが、互いに独立の共同体間で最初に「交換」の道を選択した社会がその後たどった経路の概略である。各人が自由独立の存在であるという近代市民社会はこの経路をたどった末に成立した。とはいえ、この社会の人びとも個々の個人が独立の原子のような存在にまで分離してしまっていない。モースが指摘したように人間の共同性は、ごく内輪の人びとの範囲にまで縮小してしまったとはいえ、いまだ脈々と生き続けているのである。

トウルカナのベグging（物乞い） — 贈与と交換の違い —

ここまで、人びとの間での物のやりとりのうち、交換と贈与について検討してきた。そしてその途中で、共同体の内部での物のやりとりについても多少触れてきた。それは明らかに交換ではない。しかし贈答とも異なる。贈与の場合、個人または集団AがBに贈る（あげる、与える）物は、Aの所有物である。Bが受け取る（もらう）ことによって、それはBの所有物となる。それに対して共同体の成員間での物のやりとりは、たとえば狩猟採集民のキャンプでの肉などの分配は、肉の所有者が他の成員たちにその一部ずつを「与え」、後者が前者から「もらう」という意味での贈与だとは、彼ら自身考えていない。この贈与でも交換でもない物のやりとりを、シェアリング（sharing）と呼ぶことにする。シェアリングについての検討に移るまえに、以下では執拗に「くれ」とねだることによって相手から物をもろうという事例を見ておこう。

太田至（1986）が詳細を明らかにした、北ケニアの牧畜民トウルカナの間でのベグgingは、特殊な贈与、執拗にねだられる贈与の典型的な例である。もちろんこれは家族関係の外側の人への

ベグギングである。彼らの間では基本的に、所有者が自発的に物を与えることはない。だから、相手の物が欲しければ執拗にねだるしかない。しかもその際には、それを自分の所有物と交換しようとは言わないし、また、かつて自分が相手に物を与えたという事実をあげて、だからあなたもそれをくれという表現もけっしてとらない。しかも、あなたが私にそれをくれるか断るかにはあなたしだいである、さあどっちだ、返答せよ、と迫る。まさに、ねだる方は相手が物の所有者であり自由な人格であることを認めたいので答えを迫るのである。しかし、ねだられた人は、たとえ本当の理由であれ、それを与えるつまり失うことによって自分自身が困った状況になることを理由に断ることができないのだという。あえて断るときには、いやだと言ってつっぱねるしかない。これは、彼らが互いに独立の存在として対面しながら、なおかつ、ねだる方は相手との関係の成立・維持・確認を迫るのである。他方、ねだられた方はほとんどの場合、しぶしぶながら物をあげることによって、これを認めざるをえない。断ることは、相手との関係を断ち切ることを、または私とあなたはもともと無関係だということを表明する結果となるからである。

物をねだる側の人は、相手も自分も独立の人間であることを認めたいので、そして自分が欲しい物は相手の所有物であることを認めたいので、しかも自分の物との交換ではなく、自分がかつて相手に物をあげたことに対するお返しとしてでもなく、相手の物をただただ欲しい、くれ、と要求する。彼は、私とあなたはそうしたことが許容される間柄ではないのか、と問うているのである。そして、あなたの答えはイエスかノーかと二者択一を迫る。ねだられる側も、このような場合に相手の物との交換という条件をもち出すことはけっしてしないとのことである。つまり、交換とは明確に異なる行為としての贈与が二人の間での関心事なのであり、焦点となっている物を媒介にしながら、彼らは相互間の関係それ自体の存否を問うているのである。

このようなことは、トゥルカナの間でほど極端な形で日常的に生じるわけではないが、多くのいわゆる未開社会でも、そして私たちの間でも見られることである。また、一見逆のように見えるが、自発的に自分の物を相手にあげようとするのも、同じ性質の行為である。この場合、相手も一般的にはそれを受け取るのを拒否することはできない。拒絶することは、私はあなたと無関係であり、今後もそうであると相手に表明することである。また、相手の物を受け取るにあたって、その場ですぐ自分の所有物をその見返りに渡そうとすれば、相手は、私はあなたに交換を申し出たのではない、と非難するであろう。

トゥルカナや他の人びとも、別の脈絡や場面での別の相手とは交換も行うであろう。上記のようなトゥルカナのベグギングや、一般に物の贈与（あげる・もらう）は、交換を行う当事者間の関係とは明らかに違う関係を双方がともに意識して、または結ぼうとして行う行為である。このような関係を、仮に親交関係（Friendship or Companionship）と呼ぶことにする。こうした関係は個人間のみでなく、共同体の間でも当然ありうることである。

狩猟採集民の社会 — シェアリング(Sharing) —

つぎに、ある広大な地域に狩猟採集民だけが存在し、彼らの小さな居住集団（バンド）がごくまばらに分散している、そのような地域を想定してみよう。彼らは食料その他の生活物資のすべてを100パーセント周辺の自然環境から調達しなければならない。そのため、一般に狩猟採集民のバンドは1ヶ所に定住することではなく、キャンプ地を何ヶ所か移動しながら遊動生活を営む。バンドは互いに遠く離れているので、彼らの日常生活はそれぞれのバンドごとに自己完結的である。キャンプから日帰りの範囲内での狩猟採集をくりかえしながら自給自足し、しばらくすると別のキャンプ地に移動する。そのためバンドの大きさにはおのずと限界があり、およそ10家族前後、50人前後から100人以下といったところである。バンド内のどの家族にとっても、親族や姻族はこのバンド内にかぎらず、近隣のいくつものバンドに広がっている。だから彼らはときおり他のバンドを訪れて滞在

し、あるいはそのまま居続けてしまうこともある。そのため、長期的に見ればバンドの構成は変化しており、離合集散を伴っている。

近隣のバンドといっても一般には歩いて1日で往復できるような距離ではない。家族が他のバンドを訪れるということは、その間の生活の場そのものを移すことであり、彼らの家財道具は質素で少ないとはいえ、それらを夫婦で背負って一度に運ばなければならない。家財道具に加えて訪問先の人びとへの土産や贈り物や、ましてや交換のための品物などを持参する余裕はないと言ってよい。だからバンドの構成に変化があっても、日々のキャンプの生活は自給自足の自己完結的な生活である。

それぞれの家族は家財道具の1セットを有している。それらの多くは自分で材料を入手し自分で製作したものであるが、家族外の誰かが製作した物も含んでいるであろう。いずれにしても基本的には誰もが必要な品々を製作する技能を身につけながら、互いに融通しあうのである。キャンプに一つまたはいくつかあればそれを共用してことがすむ品物は、全家族がそれを所持する必要はなく、誰かが作ったものがまさに共用される。

キャンプの人びとは日帰り行程で狩猟や採集に行き、女性はそれぞれの採集物を得て戻り、ある男性は手ぶらで、別の男性は獲物を得て戻る。獲物が大きい場合には、翌朝何人かで再び出かけ、解体して持ち帰ることもある。その一方、それぞれの事情で当日はキャンプにとどまる人もいる。これまで調査報告されたどの狩猟採集民についても、狩猟採集の獲得物を他の家族に分配しないという報告はない。そのプロセスの詳細は別として、当日採集に行かなかった女性には得てきた者の誰かが一部を分けており、獲物がなかった家族には肉が分け与えられる。とくに狩猟の獲物の分配については、多くの調査者がその具体的な分配のルールについて記載している。また当日獲物を獲たハンターどうしても肉の一部を与えあい、採集物を持ち帰った女性どうしてもその一部を与えあっている。女性たちはさらに、各人が料理した食物を互いに分配しあっている。その結果はお互いに、当人の料理の大半は他のいくつかの家族に配られ、当の家族の食事の大半は他の女性たちからの料理が占めるまでになっている。

問題は、キャンプの人びとがそれぞれに狩猟採集で獲得してきたものは各人の所有物なのか否かである。獲得した当人がその物の所有者なのであれば、当の獲物の所有者が自分の所有物の一部を他者に与えた、ということになる。狩猟に出かけていた男たちが獲物を持ち帰ったとき、自らもその一員である近代市民社会からやってきた調査者は、これは誰が獲ったのか、これは誰の物か、と彼らに尋ねる。すると彼らは、これはAが殺した、これはAの物だ、などと答える。あるいは、これを獲ったのはAだが、これを殺したのはBの矢で、Bが作ってAにあげた矢である、Aがそれを射て獲ったのだから、獲物はAではなくBの物だ、と彼らは答える。そこでこの第三者は、この獲物の所有者はAである、あるいは、Bであると理解する。しかしその肉は、解体ののち何人にも分けられる。Aは自分の所有物である肉を、CやDや他の成員に与えたのだろうか。その際彼らは、「これは私の肉であって、わたしがあなたにあげるのだ」というような表現をけっして口にしないし、そうした態度やそぶりをとらない。受け取る人もありがたうとは言わず、感謝のそぶりも見せない。また、当のハンターは解体と分配の場から離れたところに座って、そちらに視線も向けず、われ関せずという態度でいることさえある。

そこで調査者が年長者たちに尋ねると、彼らはほぼ次のように答える。獲物を獲得した者はそれを独占してはならず、必ず分けなければならない。しかも与える側の者は横柄な態度をとることなく、謙虚にしていなければならない、と。キャンプでの肉の分配に関する上記のような観察と聞き取り調査をもとに、多くの研究者は「狩猟採集民は徹底した平等主義者なのだ」という見解をとっている。以下はその要約である。彼らにも物の所有者という考えがある。しかし、もし所有者が自分の所有物を独占し続けると、とくに狩猟の技能は個人差が大きいので、肉を多く獲得する者とそうでない者という違いが生じる。後者は前者に依存せざるをえず、いわば負い目を感じることにな

る。また前者は後者に与えることにより優越感や威信を獲得し、後者に力を及ぼすようになる。自然のプロセスにまかせれば、こうして不平等が生じる。それを未然に防ぐために彼らは上述のような行為規範をたて、分け与える立場の者には謙虚さを強い、他の者たちはもらって当然という態度をとる。こうして彼らは平等性と互いの独立性つまり自由を確保する。

しかしこれはぎこちない解釈であると私には思われる。なぜなら、「私の物は私の物だ（おまえの物はおまえの物だ）」という考え方を彼らはわれわれと共有しているとまず認めたくて、にもかかわらず彼らは、「おまえの物をおまえの自由にはさせぬ」という拘束を互いに課しているのだ、という解釈だからである。

私は以下のように理解する。まず、「所有者」とは当の物を意のままに処分することができる者を意味する。このことは、換言すれば、その場に必ず他の人たちが存在し、彼らも当の物に関心をもっているという状況が前提となっている。その場の彼らが「この獲物は彼の物だ」と言う当の彼自身が、その肉を自由に処分することができないのだから、彼は「所有者」ではないということになる。では誰が所有者なのか、それは彼らの共同所有なのか、という質問がすぐに浮かぶであろう。しかし、彼らにはわれわれの社会のような「所有」という概念がない、またはそうした考えを排除しているのだと私は考える。

食料も含め彼らの生活資材のすべての原材料は、周囲の自然環境のなかに存在する物である。それらはいまだ誰の物でもない。しかし、それを現に獲得してきたり、加工し製作するのは、キャンプ内の誰か特定の個人または個人たちである。それは全員の視野のなかで行われる活動である。調査者の質問に対する答えとしての「それはAの物だ」というのは、それは彼が獲得した物または彼が製作した物だという意味である。それは彼ら自身の間では自明のことである。この獲物を倒したのはAである。しかし彼らの社会ではそれはAの所有物にはならない。Aはそれの所有者ではない。Aが所有者たろうとすれば、つまりそれを独占することはもとより、彼個人の意志によるあるやり方でそれを処分しようとするれば、彼はバンド全員の非難にさらされる。彼はそれをキャンプの仲間に分けなければならない。しかも、彼は自分の所有物の肉を他の人に分け与えるのではないし、他の人も彼から彼の所有物をもらうのではない。さらに、Aは、昨日Bが獲得したので食べることができた肉と今日自分が獲得した肉をBと交換するのではないし、明日獲ってくるであろうCの肉と交換するのでもない。彼らは、自分も含めバンド内の誰が獲ってきた肉であろうと、それを互いに分かち合う、共にする（to share）のである。

既述のように、狩猟採集民の日々の生活はそれぞれのバンド内で自己完結している。しかし、キャンプ内の個々の家族の生活はけっして自己充足的ではなく、相互依存している。しかも彼らの間の相互依存は、自分の所有物と他者の所有物との交換や贈答を介しての間接的な相互依存ではなく、直接的な相互依存であり、直接的な人間関係である。キャンプを共にしている10前後の家族は、そこでの生活そのものを共にし分かち合っているのである。彼らのバンドは、互いに自由・独立のそして物の所有者としての人びとや家族の集合体ではない。バンドすなわちキャンプを共にする人びとはまさに共同体なのである。

バンドの成員は、一つの共同体の成員として生活をともにしている。だから、上記のような調査者の例とは逆に、日常ふだんのふるまいと違って、バンドの誰かまたはどの家族かが、あるときまたはある場面で、これは自分の物であるとして分配や共用を拒否したり、または、自分の物をあなたに分け与えるのだということを一たとえそれとなくでも一ことさらに表出する、といったケースをこそ注目すべきなのである。そのようなときが、バンドが解体して家族が独立の人格となる場合、あるいはバンドの解体の危険が迫っている場合なのである。ただし、家族がバンドから独立の人格となったとしても、あるいはバンドが解体しても、個々の家族は単独には生活できず、再び他の家族（親族）とともに新たなバンドを形成し、あるいは他のバンドに合流して、相変わらずバンド生活を続けることになる。彼らにとって、独立の人格としての家族が集合し、家族相互の独立性と

人格性を前提に生活を営むといった、市民社会的様相のバンドは存在しないのだから。また、バンドが市民社会的バンドに変貌することを未然に防ぐために、狩猟採集社会では個人が突出する状況になることを、自分自身で回避するし、他の人びとも許容しないのである。たとえば、大きな獲物を倒した者は、それを自慢するそぶりはいっさいせず、けっして目立たぬようにひかえめにしていなければならない。他の人びともその獲物や彼の腕まえを誉めたりはせず、逆にそれをくさすことさえあえてするのである。

これは換言すれば、生活を共にするための共同体の暗黙の規範が存在し、彼らはそれに拘束されることを意味する。バンド内の人びとは互いに親族や姻族という親密な関係にあるとはいえ、彼らはつねに気配りをしていなければならない、けっして気楽に暮らしているのではない。その意味で彼らは自由でないとやってよい。ただし、彼らにも自由はある。それはバンドを去ることの自由である。ただ、あるバンドから去ることは別のバンドに入りそのキャンプの成員たちと生活を共にすることでもある。長期的に見ればバンドは離合集散しているが、個々人や家族はどの時点でもいずれかのバンド（居住集団）に属して、他の家族と生活を共にし分かち合わなければならないのである。

〔文献〕

-
- ヘーゲル, G. W. F. 2000, 『法哲学講義』(長谷川宏訳)、作品社
- 北西功一 2001, 「分配者としての所有者・狩猟採集民アカにおける食物分配」、市川・佐藤編『森と人との共存世界』〈講座・生態人類学 第2巻〉、京都大学学術出版会
- Lee, R. B. 1979, *!Kung San: Men, Women, and Work in a Foraging Society*, Cambridge University Press, Cambridge
- レヴィ＝ストロース, C. 1973, 「マルセル・モース論文集への序文」: 『M. モース社会学と人類学Ⅰ』(有地亨ほか訳)、弘文堂
- マルクス, K. 1965, 『資本論』(岡崎次郎訳)〈マルクス・エンゲルス全集 第23巻 第1分冊〉、大月書店
- モース, M. 1973, 「贈与論」: 『M. モース社会学と人類学Ⅰ』(有地亨訳)、弘文堂
- 太田 至 1986, 「トゥルカナ族の互酬性 ―ベグギング(物乞い)の場面の分析から―」: 伊谷・田中編『自然社会の人類学 ―アフリカに生きる―』、アカデミア出版会
- サーリンズ, M. 1984, 『石器時代の経済学』(山内昶訳)、法政大学出版局
- 丹野 正 1977, 「ムブティ族ネット・ハンターの狩猟活動とバンドの構成」: 伊谷・原子編『人類の自然誌』、雄山閣
- 1984, 「ムブティ・ピグミーの植物利用 ―とくに彼らの物質文化と野生植物性食物の利用を中心に―」: 伊谷・米山編『アフリカ文化の研究』、アカデミア出版会
- 1991, 「〈分かち合い〉としての〈分配〉 ―アカ・ピグミー社会の基本的性格―」: 田中・掛谷編『ヒトの自然誌』、平凡社
- 1993, 「モース『贈与論』の意義 ―贈与と交換の相違―」、弘前大学人文学部『文経論叢』第28巻3号
- 1996, 「『資本論』第1章「商品」の一文化人類学者の読み方(Ⅰ)」、弘前大学人文学部『文経論叢』第31巻3号
- 2002, 「〈分かち合い: 贈与: 交換 ―共同体: 仲間: 社会〉への序論」: 弘前大学哲学会『哲学会誌』第37巻
- 2003, 「『資本論』第1章「商品」のディアレクティーク」: 弘前大学人文学部『人文社会論叢』(社会科学篇)第9号
- 寺嶋秀明(編著)2004, 『平等と不平等をめぐる人類学的研究』、ナカニシヤ出版
- Woodburn, J. 1982, *Egalitarian Societies*. *Man* (N. S.) 1 (3): 431-451
- 1988, *African hunter-gatherer social organization – Is it best understood as a product of encapsulation?* (Ingold, Riches and Woodburn eds.) *Hunters and Gatherers(1)–History, Evolution and Social Change*. pp.31-64, Berg, Oxford